



### 学内情報

#### ◆表紙絵◆

「緑の棚田  
(塚市内)」  
岡田 博雄  
(大学 12 期)

#### ◆表紙デザイン◆

平岡 良介  
(大学 49 期)

■ 巻頭言 / 編集委員長 三宅 成司郎 ..... 1

■ 学長室より / 奥野 武俊 ..... 2

■ 奥野先生学長就任のお祝い / 杉井 康彦 ..... 4

■ 先生に贈るThank-you note / 黒田 桂菜 ..... 5

■ 藍綬褒章受章, 環境大臣賞受賞 ..... 6

■ 思いつくまに / 向井 濱治 ..... 7

■ 大学の変貌とその意義 / 宮崎 正博 ..... 11

■ 散策ツアーについての感想 / 武尾 啓次 ..... 11

■ 50年ぶりで大学を訪問して / 中原 利男 ..... 12

■ 見学という知的活動の方法について / 神田 修治 ..... 13

■ 海洋システム工学科の最新情報 / 大塚 耕司 ..... 16

■ 全学同窓会の学友会(仮称)への移行について / 定兼 廣行 ..... 17

■ 理事会報告 / 平成 20 年度会計予算案 ..... 18

■ 平成 20 年度 海洋システム工学科  
博士・修士論文ならびに卒業論文のテーマ ..... 20

■ 会員録 update ..... 22

■ 編集後記

「鷗朋」編集委員 岸 光男(大学 25 期)竹田 太樹(大学 30 期)三宅 成司郎(大学 30 期)野口 利仁(大学 33 期)  
池田 和外(大学 35 期)有馬 正和(大学 37 期)新里 英幸(大学 44 期)中谷 直樹(大学 45 期)  
松山 博志(大学 45 期)奥村 英晃(大学 46 期)

# 巻頭言

平成 21 年 4 月 1 日発行のニューズレターにてお知らせしましたが、奥野武俊先生(大学 17 期)が理事長・学長に就任されました。この吉報は、海洋システム工学科出身者にとって大変喜ばしいことです。経済情勢が激変し、また府立大学に対して何かと風当たりが強いこの時期の学長就任は大変でしょうが、これからの 6 年間で府立大学の新たな方向性が示され、一步一步着実に改革と融合が進められていくことと思います。我々同窓生は、一丸となって新学長を盛り立てていきましょう。

奥野新学長に抱負などを語って頂きましたので、同窓生からの祝いメッセージと併せてご紹介致します。

## 人間の欲望は、恐ろしい

巻頭言としては、少々低級ではありますが・・・テレビ放送が、2011 年 7 月 24 日をもって地上波デジタル放送に完全に切り替えられる。あと二年あまりで今のアナログテレビのままでは、テレビ放送を見ることができなくなる。否が応でもデジタルテレビへの買い換えを考えないといけないので、経済への刺激効果は大きい**ようだ**が家計的には大変なことである。(なお、デジタルチューナーを購入すれば、今のアナログテレビは使えます。念のため。)

我が家のテレビはというと、2007 年 3 月までは大変順調に映っていた。だから、「地デジ完全移行寸前までは、このテレビでいこう!」と思っていた。ところが、・・である。突然映らなくなった! 今まで培ってきた技術屋としての技能の限りを尽くして、どついたり・揺すったりしたが全く復旧しない。日常生活において、テレビがないという事態に陥ってつくづく思い知らされた。普段テレビを真剣に見ているつもりはないのだが、テレビがいつもそこにあり続けるという事実安心している自分、テレビから垂れ流されてくる情報量に毒されている自分がいたようだ。

妻との協議により、「テレビが壊れた」というよんどころない事情でもあり、特別財政出動やむなしと意見集約がな

されたので、とにかくテレビを買いに行くことになった。購入前に決めていたことは、「今使っているテレビ相当を考えて、32 型のデジタルテレビで十分。32 型画面に絞り、メーカー選定しよう。」であった。電気屋さんに行くと、当然であるがたくさんのテレビが並んでいる。その中から、「これだなあ。」というのを見つけた。「さて、店員さんと交渉しよう。」とした矢先、えらく割引率の良い 40 型のデジタルテレビが目の片隅に飛び込んできた。「本日まで、x 割引。ポイント還元 xx%。テレビ台半額。・・・」、「おう! 予算はかなりオーバーするが、二回りも大きな画面サイズだ。ものすごく大きな画面で、この割引率。買わない手はないゾ!」早速、購入した。配達されてきたテレビは、電気屋さんで見た時よりもさらに大きく感じた。それをセッティングして見てみると、クリアで大きな画面は予想以上の迫力であり、うれしくなってしまった。

あれから、丁度二年が過ぎた。購入した当初のあの感動した気持ちは日経つにつれて薄れ、その画面の大きさとクリアさはいつの間にかそれがごくごく当たり前のものであったかようになってしまった。この人間の順応の早さには、我ながら驚かされる。(仕事でもそうありがたいものだが・・・)最近、「このテレビの画面は普通すぎる! 今よりもっと大きなテレビが置けるぞ! もっと大きいのが欲しい!」という欲求がむくむくと鎌首をもたげてきている。いやはや、人間の欲望には限りがない。ああ、何と恐ろしい!

さて、鴟册 14 号の特集は「大学 8 期生の母校訪問見学記」です。大学 8 期の方々が、約 50 年ぶりに母校を訪問されました。その時の感想などを執筆頂きましたので、ご紹介致します。久しぶりの母校、懐かしさあり、様変わりに驚きありの見学記です。

今後とも、より良き誌面作りに邁進したいと思いますので、ご支援・ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

大学 30 期 三宅 成司郎

奥野 武俊(大学 17 期)

# — 学長室より —



2009年4月1日に大阪府知事から大阪府立大学の理事長・学長を任命され、怒涛のように押しよせて埋まっていくスケジュールに追われながら、アツという間にひと月が経過しました。慣れない毎が続いています。大学が果たさなければならない大きな課題を目の前にして、立ちすくむような日々ですが、この波をなんとか乗り切っていかなければなりません。皆様の支援と、ご協力をお願いする次第です。

さて、“自分の歩む道は自分で決める”ことは非常に大切なことですから、多くの親は子育ての時に子供に教えます。“誰もお前の代わりにはなれないのだから、自分のことは自分で決めなさい”と……。しかしながら、人生は必ずしも自分の希望通り行かないものです。私の場合、これまでの歩みの中で自分の希望した通りにできたことは、船舶工学科を希望して北海道から出てきた以外は、ほとんど無かったように思います。研究室を決めた時も、大学院に進学した時も…第一希望ではありませんでした。ただ状況に逆らわずに流されたようにも見えるかもしれませんが、目の前に来たものには誠実に取り組み、一生懸命、そして楽しく過ごしたい…そのことを自分の信条にしてきただけでした。そして結果的に、いつもまわりの同僚、先輩、友人に恵まれて、助けられ、教えられて歩んで来れたに過ぎません。このたび、母校の理事長・学長という大変な立場に立たされる事になって、正直困っている時に、多くの方が心配して声を掛けてくださいました。心から感謝しています。

大阪府立大学は統合化、法人化を経過して5年目を走っています。大阪府の経済的な逼迫した状況が顕在化した中で、大学の存在意義が問われているこのような時期での、第一の仕事は、大学の経営を考えるのは当然のこととして、これから将来のあるべき姿を考える…というより、現実に今すぐ実現でき、しかも維持可能な方策を考えることです。それは、かなり複雑な境界条件と制約条件を課された非線形最適化問題に取り組みなければならないかのようです。あるいは、大学と言う大きな船を走らせるために進路を確保して、どのように舵を取るかということも考えることかもしれません。大きな組織だけに簡単に進路変更はできません。また進路不安定なことも起こりえることでしょうし、すぐに止ろうと思っても、止まらない大型タンカーと似ているように思います。

目前の課題はたくさんありますが、大阪府立大学を応援してくれる人のネットワークを作ることが重要です。まず卒業生、在学生とその父母、近隣の町内会、自治体、議員…… そのために多くの人を訪問して、大阪府立大学の活動を理解してもらるように説明し、支援をお願いしています。これまでの大阪府立大学は、そのための努力には、正直言ってあまり力を入れてきませんでした。公立大学は「大学」であるがゆえに、地域の枠を超えた広がりをもつコスモポリタンのものではないと考えるようになってきたからだと思います。このことに決して間違いは無いと確信していますが、公立大学は「公立」であるがゆえに地域に根ざした大学にならなければいけない時代です。そのために何をすべきか、何ができるのかを考えていく必要があると思っています。



府大池(桜の頃)

とにかく、私にできる最大限の努力をしたいと思いながら、同窓会の諸兄に、格段の協力と支援をお願いする次第です。よろしく、ご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

参考 学長就任の挨拶 <http://www.osakafu-u.ac.jp/news/001143.html>



大阪府立大学<航空写真>



# 奥野先生学長就任のお祝い



大学40期 杉井 康彦

この度、奥野武俊先生が大阪府立大学の学長に就任されました。心よりお祝い申し上げます。

奥野先生のご指導のもと博士の学位を授与された後、東京大学の助手を経て、現在、工学院大学で准教授をしております。大阪府立大学修了後も、先生には学会などでお会いする機会があり、色々ご指導いただいております。

奥野先生は、研究者としても教育者としても優れており、また人間的にもすばらしく、尊敬できる方です。そんな先生のエピソードを思い出しながら、少し書きたいと思います。

私が研究室に配属された当時は、田中紀男先生が退官されたばかりで、奥野先生、池田良穂先生、西尾先生、大塚耕司先生で研究室の運営をされておりました。当時からの奥野研の伝統であり、謎でもあるのですが、研究室には女子学生が2名もいました。学科自体に女子学生が少ない中、その占有率は常に非常に高いものでした。また、研究室とは無関係の女性も時々来ており、帰るまで研究の打ち合わせを待たされた覚えがあります。その際には、残ったものと思われるケーキやお菓子が出てきたものです。

先生とは、学会にも良くご一緒させて頂きましたが、道がわからない時や店を探す時には必ず、若い女性の方に声をかけていました。ある時、“どうしていつも若い女性ばかりに声をかけるのですか”と尋ねると、何をばかなことを聞くのかと言わんばかりに、“あたりまえでしょう。男に尋ねてもつまらないからに決まってるでしょう”と教えてくれました。

私が博士課程の学生の時、あまり研究に熱心で無い生徒がいました。どうしようかと困っていたところ、呼び出して一緒に話をしましょうと提案してくれました。その際には、あらかじめ怒る役とフォローする役とを決めて、追い詰めずにうまく逃げ道を作ってあげる方が良いですよと教えてくれました。その作戦が功を奏したのか、なんとか無事に研究をするようになってくれました。

先生は研究者としてもすばらしく、ユニークで斬新なアイデアを発揮されていました。最近になって、論文の引用が増えてきており、その先見性がみてとれます。ただ、残念なことに、せつかくの研究を日本語の論文や英文のプロシーディングスのみで発表され、英文論文をあまりお書きになっていませんでした。私に査読依頼のあった論文が、先生が既にされている内容であったり、その応用であるような内容であったりしましたが、それを指摘することができず、残念な思いをしたことが何度もあります。きっと、これは造船研究全体の悪き習慣だったと思います。最近、英文誌もできたようですし、かなり改善されてきたように思いますが、外から見るとまだまだなような気がいたします。

大学は、急速な少子化や学力低下など数多くの問題を抱えています。先生が大阪府立大学の学長に就任され、ユニークで斬新なアイデアを色々発揮されて、大学の改革やさらなる発展に大きく寄与されるものと信じています。先生のますますのご活躍を心より楽しみにしています。





# 奥野先生に贈る Thank-you note



大学 51 期 黒田 桂菜

奥野先生、学長ご就任おめでとうございます。先生の教え子の一人として、心よりお祝いを申し上げます。さて、この度お祝いメッセージの寄稿という、大変光栄な機会を頂き、どのようにお祝いを述べたらよいか分からず、ただただ奥野先生と過ごした日々を振り返っておりました。そこで、奥野先生から受けた影響がいかに大きいものであったかを改めて知ると共に、社会に出てからそれがいかに自分の糧になっているかを感じる次第です。卒業後数年経ちますが、きちんと感謝の気持ちを表したことがありませんので、本稿をお借りして“Thank-you note”としたいと思います。

まず私ですが、2006年に奥野研究室を卒業後、栗本鐵工所に入社し、発電所などに使用される大型バルブの設計に携わっておりました。入社してから1年半後に、グループ会社である本山製作所に出向になり、現在は宮城県仙台市内から20kmほど北に位置する工場に勤務しております。ここでは、安全弁という、いわば機器の安全装置の役割を担うバルブの開発業務に携わっております。入社2年目でグループ会社に出向、しかも住み慣れた大阪から(私にとっては)未開の東北に行くなど、奥野研に入った頃の私では考えられないことです。奥野研に入った頃の私は、頭の中で考えていてもなかなか行動に移せない学生だったように思います。

しかし、気が付けばいつの間にか、自分の好奇心の赴くままに行動するようになっていたのです。

そういう自分になれたのは、奥野先生がいろんなことにチャレンジする場を与えてくださったお陰だと思っています。中でも印象深いのは、大学院1年目に行った韓国のワークショップでの発表です。実は、発表の内容自体はあまり記

憶がないのですが、今でもはっきり記憶しているのは、空港からのバスを降りた瞬間に、体中が熱くなるような、これまで体験したことのない独特の雰囲気です。そこはただのバスの停留所で、大勢の人が集まっていただけなのですが、初めて日本以外のアジアを訪れたということもあったのでしよう、大げさかもしれませんが日本人であることを強く意識した瞬間だったと思います。今日のようなグローバル社会で生きていくには、世界の中の自分をきちんと認識することはとても大切です。奥野先生は、普段からそういう視点で話されていて、学生の時に世界を意識する環境にいたことは、現在の私の価値観に大きく影響しています。

学生時代、奥野先生から細かい指示を受けた記憶はあまりなく、その代わり自分から進んで物事に取り組まなければ何一つ進まないことが多々ありました。しかし、こちらからやりたいと言ったことに関しては、全力で応援してくれる…これは学生にとっては、非常にモチベーションが高まります。ISOPEという論文査読付きの学会で発表したいと言ったときもそうでした。今思うと、結果もあまり見えていない段階でよく言ったものだと思われ恐ろしくなりますが、そのときに奥野先生から頂いたメールは今でも忘れることができません。

“決心してそれまで出来たところまでとめること。必ず出来ると信じて、どんな困難があっても、きつと逃げ道があると信じて頑張るのです。必ず形にしてみせることで頑張ってください。”

社会に出て、このメールの意味がはっきりと分かるようになりました。開発業務に携わっている私にとって、このメールは私のポリシーになっています。“何としてでも形にしてゴールにたどり着けば、次が見えてくる。逆に形にしなければ、何も始まらない。”

業務が何度も立ち止まってしまうとき、このメールを読むと、絶対やり遂げようという気持ちが自然と湧いてくるのです。

さて、最後に奥野先生とこれからの府大に期待したいことを述べたいと思います。世の中が目まぐるしく変化している中、企業だけでなく大学も時代の流れに対応していかなければなりません。奥野先生が学長に選ばれた理由は、こういう時代に柔軟に対応できる資質を持っているからだと思

います。これまでとは違った、新しい大学の形が必要とされるのかもしれませんが、是非、“おもしろい”人間が育つ、“おもしろい”大学にしてください。とことん知的好奇心を追求できるような環境を、奥野先生が私に与えてくださったような環境を、どんどん学生達に与えられるような大学になってほしいと思います。私も、先生のように“たくさんの引出し”を持てるよう、これからはいろんなことにチャレンジしていきたいと思っています。



## 学外ニュース

### 藍綬褒章受章

#### 須藤邦彦様(大学10期)

大学10期の須藤邦彦様が、平成20年11月3日の秋の褒章にて藍綬褒章を授与されました。この藍綬褒章は「公衆の利益を興した方又は公同の事務に尽力した方(内閣府 日本の勲章・褒章による)」に授与されるそうです。須藤様は長きにわたり環境問題に取り組んでこられ、現在も兵庫県の地球温暖化防止活動推進員として家庭における省エネ等の普及活動をされています。今回は、その地球温暖化防止活動に対する功績が認められて受章されました。

須藤様が環境問題に取り組むようになった経緯は、賜朋12号「大学10期の須藤邦彦氏 環境大臣賞を受賞; 大学10期 増田征二」に詳しく紹介されています。(そこには、須藤様が収集された地球温暖化に関する貴重なデータも掲載しています。)

須藤様の受章をお知らせするとともに、ますますの活躍を祈念致します。

### 環境大臣賞受賞

#### 細田龍介先生

細田龍介名誉教授が、平成21年6月4日の環境大臣賞 地域環境美化功績者を受賞されました。この環境大臣賞 地域環境美化功績者は「地域環境の美化のため、多年にわたり、顕著な功績のあった者・団体」に授与されるそうです。細田先生は1994年から瀬戸内海国立公園の由良成ケ島において清掃活動や成ケ島の貴重な動植物の調査研究を地元の方々とともに行ってこられました。また、これらの活動を通じて漂着ゴミによって成ケ島の環境が著しく損なわれていることを世間に公表し、環境問題にしっかり取り組むことの重要性を訴えかけられました。今回は、その自然保護活動・地域環境美化活動に対する功績が認められて受賞されました。

細田先生の受賞をお知らせするとともに、ますますの活躍を祈念致します。

# 大学8期生の方々が母校訪問されました！

編集委員長 三宅成司郎(大学30期)

平成20年11月19日に、大学8期生の12名の方々が青春時代の思い出が一杯詰まった母校を見学訪問されました。大学8期生というと私が大学30期生ですので、22期上の先輩達ということになります。私が卒業してかれこれ27年経ちますので、大学8期生の方々が卒業されてからだと50年近くが過ぎたこととなりますね。

半世紀を経ての母校訪問の見学記を寄稿いただきましたので、以下にご紹介させていただきます。仲間が集って大学を訪れるという楽しさ、久しぶりの大学という懐かしさと学舎やカリキュラムの様変わりへの浦島太郎的な戸惑い(50年という時間の重みを感じさせます)、見学を終えての本学科への大いなる期待感、等々が文中から滲み出ております。

当日の案内役は、池田先生と坪郷先生でした。学内・学科施設の見学や各研究室の先生方からの研究内容説明等があった後、奥野副学長(訪問当時)と懇談され、有意義な楽しいひと時を過ごされたようです。

参加された方々に当日の感想などの執筆をお願いし、向井様にそれらを見学記としてとりまとめて頂きました。ただ、それぞれに味のある文章ですので、見学記と重複する部分はありますがすべて掲載させていただきました。それでは、「大学8期生の母校訪問見学記」をお楽しみ下さい。

## 母校キャンパス見学記

# 思 いくままに

大学8期 向井 濱治

### 1 はじめに

今回8期生同期会では、卒業後約半世紀を経て母校キャンパスの見学をおこなった。8期生は最近数年に一度のタイミングで1泊泊まりで懇親会を開いている。それぞれに社会での役割を終え、現在では各々の人生を楽しんでいるが、幸いなことに1名の物故者を除いて健在である。会への参加率も非常によく、多いときには22名中19名の

こともあり再会毎に親交が深まる感じである。これは人生で最も多感な時期に、同じ環境の下で過ごし、利害関係が全くなく、全てが対等で、お互いに良い事も悪い事も共有しているために、何を言っても許されると言う安心感があることによるものだと思う。

今回の見学会は、私が一度学校に行ってみようという提案し、みんなが賛同して実現したものである。見学記につい

ては、提案のキッカケを作ったのがたまたま私であったために、纏めはお前がやれと言うことになり損な役割を引き受けざるを得なくなった。現役時には、計画書、報告書、技術論文、施工法、管理マニュアルなど数多くの書類を作成してきたが、これらの書類はいずれも目的と対象者が明確であったが、今回要求される見学記、感想文はその点が不明確であり、同時に半世紀前の記憶を手繰るため間違うと言う心配もあり少し悩んだが、少々の間違いは許されるものとして気楽に思いっくままに書くことにした。

## 2 キャンパスの変貌

当日は、みんなが揃って高野線紀見峠駅から乗車し白鷺駅下車で登校したが、通学路も解らず駅前のロータリーの看板をキョロキョロ見ている間に約20名の女子学生が三々五々に早足で駅正面右側の歩道を進んで行くのが見え、我々一行もノロノロと追従した。同期生の1人が、大阪女子大学が同じキャンパスに移動して学校名も統一されたことを知っており、説明を受けて納得したが、新設された駅と駅名や学内では見かけることのなかった女子学生の多くに遭遇して、我々の時代との相違にまず驚かされた。

正門も堂々としており、1歩踏み入れた校内には美術館を思わせる近代的な建物と整然と植えられた大小の木々が茂り芝生も鮮やかで、丁度紅葉の始まる時期でもあったために、道路の両側に数多く並んでいた自転車が無ければ、キャンパスと言うよりも立派な公園と見間違える程であり、薄汚れた木造校舎と未舗装の道路で砂埃と水溜りの中で過ごした我々の時代のキャンパスとの比較は無意味な別世界であった。

暫く歩くと、新しい建物と建物の間に周辺では1番古いA6棟(旧船舶工学科の建物)とその裏側に今では少しみずぼらしく見える水槽試験場を見ることができ、我々がこのキャンパスの出身者であることを実感できて少し安堵した。更に学生会館、最も新しい総合教育研究棟、学術情報センターなどを見学したが、喫茶店の雰囲気のある場

所でのんびりとお茶を飲み、また談笑している学生達、立派な図書館に静かに出入りしている学生達を見て、比較することのできない環境の変化に驚くばかりであった。

無意味なことであると思うが当時の我々の様子を少し思い出してみると、ハイカラな名前で大学生になったことを実感できた「西洋思想史」の授業を受けた階段教室、平行線は無限大で交わると言われて感激した数学の授業と、Gorge をゲオルゲと誰かが読んで先生からドイツ語にかぶれるなど言われた英語の授業、などを受けた教養学部の薄暗い教室、フラフープとトランプで遊び、タイガー計算機の音が騒がしかった船舶工学科生の唯一の溜まり場であった旧6棟 2 階の製図室、物理実験のレポートを、計算尺が買えないために7桁の対数表片手に惨めな気持ちで作成していた物理実験室、1人に1台の実験台が与えられ、主要な薬品が目の前にあって自由に使え、薬品を混ぜ合わせたり燃やしたりして楽しむことができた贅沢な環境の化学実験室、少ないメニューの中から1番安くて腹の膨れる両方で35円の「どんぶり飯と素うどん」を常食にしていた汗と油の臭いが充満する長椅子の食堂。

このように見学者全員が同じ体験をし、共有できる思い出の場所がそれぞれどのあたり在ったかを、唯一残ったA6棟を基点に推測して楽しんだが、残念ながら誰も正確にその場所を示すことができず、もはや建物から昔に回帰することは不可能であることを改めて認識することができた。帰りは中百舌門から中百舌駅に歩いたが、ここでも我々の記憶にあるテニスコート、野球場、ゴルフ場はなく新設された地下鉄の入口を含め駅とその周辺に昔を思い出せるものは何も見つけることができなかった。

## 3 海洋システム工学科

学科の変貌も著しいものであった。各々の研究室ではそれぞれにパンフレットなどを準備したうえで丁寧に説明していただいた。唯ここでは新しい学科の内容を紹介することが目的ではないので、説明の内容を感覚的に把握し、船舶工学

科出身者のノスタルジー主体での感想を書くことにする。

### 1) 水槽試験場

在学時と同じようにそこでは水の中で模型が動いていた。作動システム、計測機器などは数段優れ効率的になっていることは確かであろうが、質疑で飛び交う Cb, 動揺, Taylor などの言葉はそれぞれになつかしく耳に響き、自分達が正にこの卒業生であることを実感できるものでうれしかった。在学中、私は殆ど勉強をせず劣等性であり、習得した内容は残念ながら

\* 3000tクラスの貨物船のライン図と排水量計算およびG・Aの作成

\* 初歩の船舶算法および初歩の材料力学

だけであり、流体力学、船舶推進抵抗論などの授業は全く理解できていなかった。ただ不思議なことに赤崎教授(当時 学長)の「船舶推進抵抗論」は大学ノート4分冊で青図を丁寧に張り付けたものが、いまでも手元にのこっている。何回も転居しその都度学生時代の証拠が消えていくにもかかわらず、このノートだけが残っているのは不思議である。

会社では幸か不幸か約40年間、その殆どの時間を船の現場で仕事をするのができ、しかも近代的な専門工場でもなかったために、B・C、タンカー、PCC は勿論数多くの特殊船の製作、修理にかかわることができ、さらに現在話題になっているインド洋で活躍中の防衛省の補給艦、護衛艦も私が直接がけたものが活動しており、テレビでその姿を懐かしく見ることができる。

この様に大学での専門科目の勉強はわずか2・3年で、入社してから仕事でかかわる期間のほうがどのような仕事であれはるかに長く、例え専門的な知識がなく、また劣等生であっても企業での仕事にはあまり影響がなく、入社後の意思の方が大切だと言うことができる。一方で造船会社で仕事をするようになった私の場合、周囲が船舶工学科の出身であることを知っているために、当たり前のように船について相当の知識を持っているとして接触してくることが多いが、ありがたいことにここで学校で教えてもらった初歩の知識が、よく知っていると思わせるのに実に有効

になるのである。さらに船出身者として、関係者に恥をかかしてはいけないと言う自覚を呼び起こされることにもなり、知らず知らず仕事に励まざるを得ない状況になったことも確かである。

### 2) 材料試験場 環境分析装置室

材料試験場の万能試験機は、昔のものの形は思い出せないが懐かしかった。環境分析装置は、関係の研究室の説明を聞いたあとでは当然の機器ではあったが、ガスクロなど何故この様な機器がここに違和感があった。

材料試験場が懐かしいのは、私の卒業研究が「有孔鋼板の研究」で中野君と共に岡村先生の指導を受けたことによるからである。長方形の鋼板に孔を開け簡単に言えば Strain Gauge を張って引張り、Stress-Strain Curve を描くことであるが、残念ながらそれが何のために行われていたかよく理解していなかった。強いて言えば、塑性という言葉と領域があることを理解したことくらいだったかもしれない。それが理解できたのは、入社後、船内で部材の破壊、曲がり、歪、クラックに直面して船が壊れると言うことを経験したことによるものであり、また岡村先生が暫くの間、造船学会誌にその研究内容の発表を続けていただいたおかげである。最初はよく解らなくても後で習ったことを成る程と気がつくことは結構多い。

各研究室とも室内はパソコン用の電線が張り巡らされておりパソコンが林立しているが、誰かが、ある教室の戸棚の中に使われていないタイガー計算機が1台置いてあるのを見つけてみんなで喜んだ。

### 3) 海洋システム工学科の特徴

池田先生の話によると造船が斜陽産業であることもあり、受験生の人気はあまりよくないようである。従って学生の質を心配することもあるようであるが、卒業生の就職先では評判が非常によく実績もあがっているようである。これは旧い学科名からわかるように、船舶と航空だけが実際の製品を対象にした学問であり、完成品へのアプローチの方法が自然に身につけているために、自動車、電気製品など対象物が違っても、部分、極所で高度な知識を持っているよりも、企業で実際の製品を対象にして仕事をす

る際にプラスになっているのではないかと推測できる。

#### 4) 海洋システム工学科の将来

今回は、各研究室とも準備された資料で実に丁寧に説明していただいた。ただその意図、目的は感覚的には理解できても何をどのように処理して、何を成果として得ようとしているか解りにくいものもあった。これは我々に専門知識が不足していたこと、また実際に我々が製品を対象にして仕事をしていたために、形のあるものを求める傾向が強いこともあるが、新しい分野であるために、工学部よりも理学部の要素が強く、手探りの状況であることが原因であると思われる。

一方で、環境、資源の両面から海への関心、依存度が1段と高まることは容易に想像でき、海洋システム工学が時を得た学問であることはいうまでもない。説明を受けた中には、水中グライダーのように新聞にもとりあげられ社会の話題にもなり実現の近いものがあることは喜ばしいが、開発的要素が多いため、形として残せるようになるには相当の時間と努力が必要と思われる。

同期生の中には、50年前に今の学科ができていれば自分の人生も変わったものになっていたかも知れないのにと残念がっている者もいたが、このようなときに奥野先生が学長に昇進されるということは、海洋システム工学科の卒業生にとっても大変喜ばしいことであると同時に学校としても正しい選択をしたわけで、それだけ期待も大きいと思われる。学長となると行政面での仕事の比重が高くなり大変なことは確かであるが、学内と同時に社会に対しても海洋工学の重要性をアピールしていただくと期待するものである。

幸いにも奥野副学長(見学訪問)当時とは10分程度面談できる機会を得た。その際、現在の学生気質についての話題があり、その中で優等生ではあるが、覇気のなさ、創造性のなさが見られることを愁いておられ、成る程と思ったが、その人柄と包

容力で、学生達の精神面での改革が勧められることにも期待するものである。

## 4 おわりに

見学者全員が学校の受け入れに感謝しており、率先して準備、説明していただいた先生方は勿論、多分清掃などにも協力いただいた学生諸君にもお礼を言いたいと思います。また船舶という弱小学科を消滅させることなく、海洋システム工学へと改革、発展、認知させるために努力された多くの先生方および関係者に敬意を表します。

一方的な表現で不愉快な点があったかも知れないことはお詫びしますが、今回長時間にわたって説明、案内をしていただいた池田、坪郷両先生に心から感謝します。

最後に、我々と同世代の卒業生の方々に申し上げます。機会を作って、学校を訪問することをお勧めします。青春時代を思い出すと共に新しい学科の内容に接することができ、無縁となっていたかもしれない学校への期待と近親感を必ず持つことができるようになると思います。



# 大 学の変貌とその意義

大学8期 宮崎 正博

今回、同期会(大学8期)で阪府大の見学ツアーが計画され三年振りで訪れた母校は、相当の変りようであった。卒業以来始めての人にとっては、船舶動揺水槽以外は昔日の面影を全くとどめない風景と講座の変貌に驚いたことであろう。卒業以来半世紀弱、当然といえばそれまでだが……。

さて、我々の在学時代は海運と並んで造船は、わが国の基幹産業でありそれに応える造船工学であった。しかしその役割は自動車、IT 産業と移り今や地球環境、生命科学にその座を移してきている。

この変化を先取りして、身形を改革してきた船舶工学科の先生、関係者に敬意を表したいと思う。

問題はこれからの中身であろう。幸い今、卒業生はその優秀さにおいて高い評価を社会で得ていると聞くが少子化で甘やかされて育ち、パソコンの KEY をたたけば欲しい答えが得られ、話したければ時間を問わず携帯電話でやり取

りする環境で育った若者たちをどう大学が目指す人物に育てていくのが課題であろう。今、世の中のあらゆる分野での変化、進歩発展のスピードは極めて速く人の先を行き、国際競争に勝ち抜くためには基本原理を理解し創造力豊かな人が求められるのではなかろうか。

最近の学生は問題の答えを先に乞い、何故そうなるかを考えると言う受検勉強型の思考回路の人や、複雑な計算もパソコンで簡単に出来て答えは絶対正しいと信じて疑わない(桁の間違いは判らない)、所謂相場の判らぬ人が多いと先生から聞く。分数計算の出来ない東大生の報道も然り。

公立学校法人化に伴う大学の存続と学校経営、進学率の高い中での少子化による質の低下等等、先生方のご苦勞察して余りあるが、我が母校は将来に亘って時代の要請に応えていくと見学ツアーを通じて感じ、信じた次第である。

# 散 策ツアーについての感想

大学8期 武尾 啓次

大学卒業後、半世紀ぶりに不安と期待を胸に大学訪問。約5時間にわたり坪郷先生の案内のもと実験設備、研究室等を見学、大学の現状紹介、授業参観等盛り沢山の **Schedule** を終へ、特に強い **Impact** を受けた **Events** に就いて感じたことを述べてみたいと思います。

1) まず、我々の大学時代はいわゆる **Hard** 中心、特に船

舶建造という観点より勉強(?)したとの記憶が強い。それに比べて、現在の6講座構成での海洋システム工学科のカリキュラムによると、海と共生していく人間活動のあり方を探るという海洋、環境をターゲットにした全方位の研究、基礎理論の勉強との説明を受け、時代に即した形態になっているのだなあ、とただただ驚きの一言であった『時代の流れ』。

2) 次に、大学のキャンパスが整備され(水槽は50年前のままであったが…懐かしかった)浦島太郎のような気持ち?で見学をし、また各研究のテーマが雲の上の話で小生詳細については理解(?)出来ない事ばかりであった。

小生卒業後は商事会社に入社、一貫して塩風の当たる**Hard**…船舶輸出、港湾の建設、船舶航行支援設備の建設、途上国向け造船関連機器輸出/技術移転 等…海に関係ある案件を35年間にわたり広く/浅く経験してきた為か、各研究室より専門分野の説明わけでも、今一つピンと来なかった。



海洋システム工学科がターゲットにしている資源、空間利用、環境工学は50年前にはあまり話題にもならなかった…時代の流れ/変革…改めてしみじみと **Culture shock** をうけました。

今回の散策にあたり大学関係者の受け入れ態勢に対し感謝いたします、尚次回同じ様な企画あれば現役学生諸君との歓談のできる **chance** あればとおもいます…ヨクバリか!!



水槽内部

## 50 年ぶりで大学を訪問して

### 大学8期 中原 利男

私どもは府大の船舶工学科の入学、卒業しましたが、今は海洋システム工学科となっています。学科変更以来何かしっくり来ないものが有り、自身老齢となり大学がすこし縁遠くなっていたのが更に無縁になろうとしていました。しかしながら、今回の訪問で諸先生方に研究室を余すところなく案内していただき、在学中の懐かしい研究テーマや施設を思い出し、船舶工学科健在を認識でき、かつ安心もしました。

しかし何より私の不明を思い知らされたのは、馬場研究室、大塚研究室、山崎研究室、有馬研究室など、我々の時代にはテーマに出来なかったことが我が学科の半数を占めていることを説明いただき、「海洋システム工学科」の公称にいたく納得した次第です。

これからも、「海洋」のすべてを網羅できる学科に発展されることを祈念いたします。



### 1. はじめに

私たち大阪府立大学船舶工学科昭和35年卒業同窓会は、最近概ね2~3年に一度会合している。

その会合の中で、誰言うことなく一度現在の母校キャンパスを見学したいものだ、という意見が持ち上がった。それは会合のたびに、私や大野君や城野君が府大キャンパスは私たちの頃に比べ見違えるように立派にキレイになったと、大いに吹聴したからかもしれない。大野君は鷗朋会の会長だったし、城野君はAO入試に関係しているので府大キャンパスを何度も訪れよく知っている。私もNIRO<sup>(注1)</sup>やMTS研究会<sup>(注2)</sup>に関連して、細田先生や奥野先生を府大キャンパスにお訪ねしたり、姫野先生企画による同窓先輩 岡本洋氏の海事セミナーに参加したりして何度か府大を訪れ、昔のバラック校舎から見違えるように整備された緑の濃いキャンパスを見て、それに加えて府大海洋システム工学教室の元気な活躍を見聞し、常々感心していたので、府大キャンパスの見学は有意義なことであると思った。

関西在住の同期生が中心となり、府大の先生方へお願いと相談をして計画を進め、2008年11月18日に南海高野線の紀見峠の国民宿舎「紀伊見荘」で温泉入浴、宴会、一泊して翌日19日に府大キャンパスを訪れ見学した。府大では坪郷先生が終始アテンドしてくださり、池田先生、大塚先生、馬場先生、有馬先生、柴原先生等の説明により、実験水槽、強度試験設備、海洋環境研究設備を見学し、馬場先生の授業見学のあと、奥野副学長先生(訪問当時)と懇談する光栄にも恵まれ、大変有意義な見学をすることができた。

### 2. 見学と私

ところで、私は子供の頃から見学というものが好きであ

った。当時の先生方が熱心で、消防署、水道施設、造船所の進水式や神戸港での竣工船の見学によく連れて行ってくださった。私たちも普段の教室から解放された遠足気分がうれしく熱心に参加した。そして私は見学好きの人間になっていった。

大学でもその気分が抜けず、夏休みの工場実習にも積極的に参加したが、そのうち私たちのクラスで、一度各地の造船所を見学する旅行をしよう、ということになり、1959年春、私たちが3回生を終えた春休みに「西日本造船所見学」として同期生全員で見学旅行をやることとなった。当然のなりゆきとして、岩佐先生をはじめ当時の教室の先生方には、造船所幹部へのお願いや卒業生とのコネクションを紹介いただく等たいへんお世話になった。私も見学好き人間として、これには率先して参加し、内海君と組んで見学旅行のガイドにするため、見学する造船所について調査し、ガリ版刷りの「旅のしおり」を作り皆に配った。その表紙を次ページ図に示す。これは古ぼけたもので、また図案も稚拙なものであるが、なつかしく思うとともに、よくも今まで残っていたものとも思う。同期仲間にも思い出される向きがあると思う。

この見学旅行は大変楽しく有意義であった。春の瀬戸内海、北九州、長崎をめぐる、三井玉野、NBC呉、日立因島、八幡製鉄、三菱長崎等の工場を見学したが、行く先々で担当者や先輩卒業生が親切な工場案内をしてくださり、そのあと会食まで催してくださり、大変うれしい思いをした。何年かあとに、関西造船協会だったか何かの会合で田口先生にお会いしたときに「君たちのクラスはよく揃っているいろいろなイベントをやっていたね」と言われたことがある。こんど府大キャンパスを見学しようということになったのには、メンバーにこの気分が残っていて、よみがえったのかも知れない。



図 旅のしおり表紙

### 3. 見学という方法の意義と限界

卒業、就職したあとも私は仕事の関係で、造船所や機器メーカーの他にも、国内、外国の、海洋開発、宇宙開発に関する工場や研究所を訪問して施設を見学することを数多く経験した。これらの経験を通じて、私は見学というものの有意義なることを痛感する一方、知的活動というか知識を伝える方法として一種の限界もあるな、という想いも持っていた。見学の有意義なこととは、いうまでもなく「百聞は一見にしかず」ということで、実際に見て、許されれば触ってみて、さらには現場で問答をしてリアルな体験による理解をするということである。

限界とは、見えるものは見学できるが、計画、設計、開発の内容などの目に見えないものや、形になる前段階のものについては見学だけでは理解できない、ということである。私の経験した見学でも、中には親切に設計室まで案内される場合もあったが「これが設計室です」と言われて見わたしても、机やパソコンが並んでいるのは見えるが、机の上で何が行われているか、計画や設計の内容まで

は見えない。ましてや机について仕事をしている人の頭の中で行われている知的創造活動(かどうかはさておいて)の内容は見えるわけがない。このことは私自身、設計や開発、さらにはその管理の仕事にたずさわった経験からも、常々痛切に感じたことであり、創造的な知的活動の内容は極めて重要なことでありながら、外側からはなかなか見ることができない、理解することができないものである。このことが見学という方法の限界であると思ってきた。

### 4. 限界の拡大—知的方法としての見学のありかた

ところが今回の府大見学では、限界と思っていたことがある程度取り払われたというか、限界がかなりおし抜けられたと感じた。それは各研究室や実験設備でやられている内容が私なりによく理解できたということである。例えば実験水槽では、懐かしい水槽に種々の近代化がなされて活発に稼動していることは目で見てわかるが、それだけではなく、池田先生から実験中の次世代自動車船(PCC)船型の研究の狙いや、PCCは横風中の斜航が大きいがこの研究方法として、種々の横風等の条件についてパラメトリ

ックに実験したデータベースを作成し、それを利用して実際の斜航状態を推定するという方法について説明をうけ、さらにはその方法論が学界でなかなか認知されなかった等の苦労談も聴くことができた。それを聴いて私は Taylor の系統的船型模型試験データベースを連想した。またこれは陰関数的問題を陽関数的問題に置換えて取組むという、よい方法といえるのではないかと思った。

有馬先生の水中グライダーも興味深かった。私は現役時代、潜水艦船の設計、開発をやったが、この世界では重量と浮量の差をなるべく少なくし、ゼロにしてバランスさせることが眼目であった。ところが水中グライダーでは重量と浮量の差を利用して翼効果により前進力を発生し水中航走するという逆転の発想が目新しく感じられた。大塚先生の海洋バイオマス利用は、私の知識不足のため内容的には理解が不十分であったが、それでもこれは今後の海洋システム工学の重要なフロンティアであると感じた。このように各先生方はそれぞれご自身の研究内容を生き生きと説明してくださり、私はその内容を私なりに理解するとともに、府大海洋システム工学教室が健在で、末頼もしい活動をやっておられることを実感し感銘を受けた。

それは丁度、テーマを絞った小さなシンポジウムで会場当番となった研究所の者がシンポ参加者を自分の研究施設へ案内しシンポジウムの話題にもなったことについて、研究仲間に説明するというような感じでもあった。今回の府大では、説明する先生方も私たちのことを一種の身内と思ってホソネの話をされ、聴く私たちも好意を持って後世の方々の活躍を理解したいと、感受性の開口を一杯に拡げて聴くという、善いコミュニケーション関係ができていたと思う。このように、見学する側の「ひとつ見聞させて貰おうじゃないか」という気持ちと、案内する側の「これをホソネのところで理解して貰いたい」という気持ちのベクトルが一致して、両者の間に独特の善い関係が醸される

ことが大切であり、今回の見学ではそれがうまくいったと思った。私もこれまで見学する側と案内する側の両方を経験し、無意識のうちに上述のようであればよいと思いながら取組んできたが、それをいまさらながら意識的に理解できたという気がする。今後私も老齢ながらも同様の立場になるかもしれない。そのときにはこのことを意識して取組みたいと思う。

## 5. おわりに

最後の奥野先生との懇談は親しみのある、楽しいひと時であった。

理事室の赤いじゅうたんの廊下を歩くときは少し緊張もしたが、奥野先生の部屋へ入ると一変して和やかなムードとなった。奥野先生は私の知っているいつもの感じで、「チョット〇〇さん」と話をしながら聞き手の肩や腕に触れるというような親しい身振りで、最近の学生気質や大阪府との折衝などを興味深く話をしてくださった。

このように懐かしく有意義な見学会をプロデュースしてくださった、坪郷先生、池田先生、大塚先生、馬場先生、有馬先生、柴原先生をはじめ、海洋システム工学教室の皆様には厚くお礼申し上げます。

今回の見学は、いろいろの有意義な見聞ができたこともよかったが、それに加えて、私自身が見学という知的活動について、その意義や限界についてアレコレ考え、さらにその限界を超えるための条件として、見学者、案内者の相互の心構えについて考えてみることもでき、有難い機会であった。

(注 1) NIRO:(財)新産業創造研究機構

(注 2) MTS 研究会:海上交通システム研究

# 海洋システム工学科の最新情報

大塚 耕司(大学 35 期)

前回の鷗朋 13 号において、「ますます進化する海洋システム工学科」と題して海洋システム工学科の変化についてレポートさせていただきました。そのときは、新たに発足した山崎教授の研究室と今治造船寄附講座の研究室の内容、ならびに新井、二瓶、桃木の 3 名の新任助教について紹介いたしましたが、今回は、定年あるいは転職等で 5 名の先生方が海洋システム工学科を離れるという少々さびしい変化について報告することになりました。

これまで 44 年間も海洋システム工学科の教員として、さらに生産技術センター(工場)主任としてご尽力いただいた、北浦堅一先生が、本年 3 月末で定年退職されました。先生には、本年度から全学的な学生サポート部門においていろいろとお手伝いいただいております。

産学官連携機構との兼任で教授を務めていただいた溝畑朗先生も本年 3 月末で定年退職となりました。先生には、大学院の講義や博士学生の研究指導をお願いしておりましたが、講義については本年度も非常勤講師としての立場で引き続き担当をお願いしております。

材料・構造系の研究室を引っ張ってこられた正岡孝治先生は、起業・独立という海洋の教員ではこれまでになかったパターンで退職されました。ご自身は「先行き不透明」と謙遜されていますが、先生のこれまで蓄積された知

見や技に対する需要は多いと思います。また時々大学にも来られ、ゼミ等で後進の指導にも尽力いただいております。

船舶流体力学、特に計算流体力学の教育研究で強力な牽引役でありました田原裕介先生は、本年 4 月に(独)海上技術安全研究所に転職されました。今後は、教育に関するウエイトが減る分、さらに精力的に研究活動を進められ、すばらしい業績をますます積み上げられることと確信しています。

最後に、船型設計に斬新な流体力学的アプローチの手法を導入されてきた勝井辰博先生が、神戸大学大学院に転職されました。先生は最近津波の研究にも着手されており、神戸大学ではその分野の研究も進められるとお聞きしています。本年度は、非常勤講師としていくつかの講義の担当もお願いしています。

このように、一気に多くの先生方が抜けることになり、教室運営の面では正直厳しい状況とはなりましたが、そこはファミリー意識の非常に強い海洋システム工学科です。上記のように、退職された先生方にも様々な形でご助力いただくとともに、現有スタッフがガッチリとスクラムを組んで、他学科をはるかにしのぐ活発な活動を展開しております。

2009 年 4 月 1 日現在教員組織

☆印は客員教授

専攻	分野	講 座	教 授	准教授	助 教
航空宇宙海洋系専攻	海洋システム工学分野	海洋システム工学	池田 良穂 山崎 哲生 馬場 信弘 大塚 耕司 ☆宇都 正太郎	有馬 正和 坪郷 尚 片山 徹	山田 智貴 中谷 直樹 新井 励 柴原 正和 二瓶 泰範
		次世代船舶技術 (今治造船寄附講座)	☆珠久 正憲 (非常勤)		桃木 勉

標記関連の記事は、本号掲載第 49 回理事会(2月3日開催)報告とニューズレター(第6号4月1日刊)に記されていますが、我々にとって関わりの深い事項ですので、今号の紙面も借りて簡単な補足説明と審議中間報告をいたします。

学友会へ移行の趣旨は、「大学と会員(卒業生・在校生・教職員等の個人)との連携促進、会員相互の親睦を図り、会員が大学の良き理解者として発展を支援する。」です。移行に際して、先ず卒業生ネットワークを構築して順次趣旨に添う事業を行うことになっています。同窓会組織のこのような活動は、近隣の大阪市立大学友会、神戸大学友会等で既に活発に行われています。学友会の運営経費は、新入生の入会金や大学の拠出金等から賄われる予定です。なお、現在の学部・学科等单位同窓会の諸活動は、従来通りです。

全学同窓会理事会の審議経過：学友会への移行を基本合意。現在、現全学同窓会の資産の引継、単位同窓会との会費の重複・徴収方法、名簿の移管・セキュリティの確保等が審議継続中。

## 学内ニュース

(受賞者)平成 21 年 5 月 28 日に開催された日本船舶海洋工学会総会ならびにポスターセッションにおいて、下記の方々が受賞されました。おめでとうございます。

関西支部支部長賞：片山徹、池田良穂「高速曳航試験システム」

学会賞：大塚耕司「海洋肥沃化装置の包括的環境影響評価」

ポスターセッション最優秀賞：堀友則「MLPG 法による熱弾塑性解析手法の開発と溶接問題への応用」

ポスターセッション優秀賞：生島一樹「陽解法FEMに基づく大規模溶接構造物の高速解析手法の開発」

川原佑来「遺伝的アルゴリズムを用いた船内区画配置最適化に関する研究」

山田阿門「マンガン団塊の開発に関する環境指標を加えた総合的経済性評価に関する研究」

(行事)・青少年サマーセミナー;平成 21 年 7 月 18 日(土) ;暫定テーマは「小さな地球(環境系)」

・オープンキャンパス;平成 21 年 8 月 8 日(土)～9 日(日)

・白鷺祭(大学祭);平成 21 年 11 月 1 日(日)～11 月 3 日(火)

・工学部同窓会開催;平成 21 年 11 月 1 日(日) 15:00～17:30

場所:大阪府立大学 A5 棟 (旧工学部 8 号館)8-122 教室 行事:特別講演会+カクテルパーティ

詳細および申し込みについては、工学部同窓会ホームページ(下記 URL)をご覧ください。

大阪府立大学工学部同窓会ホームページ <http://www.opucr.osakafu-u.ac.jp/eng/link.html>

日時:2009年2月3日(火)18:00~20:00

場所:大阪府教育会館「たかつガーデン」2階 コスモス

出席者:外山嵩, 長尾修, 岡本英昭, 城野隆史, 増田征二, 小幡良男, 杉山和雄, 定兼廣行, 西田正孝, 奥野武俊, 岩崎泰典, 池田良徳, 藤原利弘, 三宅成司郎, 池田和外, 有馬正和, 山田智貴, 坪郷尚, 片山徹, 中谷直樹, 新井勲, 桂樹哲雄 以上22名(敬称略)

資料:第49回理事会議事次第

#### 1. 開会挨拶(片山理事)

#### 2. 会長挨拶(定兼会長)

奥野学内理事の母校理事長・学長選任の報告, 議案の活発な協議の依頼。

#### 3. 議長選出

岩崎副会長の選出。議長発案により各理事の自己紹介。

#### 4. 議事

##### (1) 報告事項

###### a) 平成15年度会計報告

山田理事より平成20年度の会計中間報告があり承認された。

###### b) 編集委員会報告

三宅編集委員長より以下の報告があり承認された。

・奥野理事が来年度より大阪府立大学理事長・学長に就任する予定である。奥野理事に対する激励の意味も込めて、先日リーガロイヤルホテルにおいて実施された17期の同窓会の内容を記事にして欲しいと西田理事に依頼。

・鷗朋14号は例年3月末日発刊予定であるが、内容が奥野理事の学長就任特別号となるため発刊は就任後の4月1日とする。

・鷗朋の表紙絵が不足してきたため、再度収集することを検討しているがどなたか絵を書かれる同窓生を紹介して頂きたいとの報告。

大学1期の池島彊様に絵心があるので相談してみたらどうか、とのご提案あり。事務局を通じて、コンタクトしてみる。

###### c) その他

増田理事より大学10期の須藤邦彦様が藍綬褒章受章との報告。

##### (2) 協議事項

###### a) 平成21年度会計予算に関する件

山田理事より平成21年度予算計画(案)が提案され承認された。

###### b) 府大コミュニティ・学友会設立に関する件

現在実質的にほとんど機能をしていない全学同窓会を新設

する大阪府大学友会に移行するとともに各学部・学科、地域同窓会、部活・サークル同窓会等も学友会の内部組織として連携することを大学から提案されている。主な目的は本学卒業生の名簿管理から卒業生への各種情報提供であると池田理事より説明があった。この協議事項に対し以下のような議論がなされた。

・今回初めて聞く話であるが随分話が進んでいるように感じる。その必要性はどこにあるのか

→大学および全学同窓会として卒業生の名簿を作りたいと考え議論を進めてきたが、各分野の同窓会の協力がなければ実現できないといった結論に至った(池田理事)

→その結果同窓会を新たに学友会としてまとめる経緯となった。

・アメリカでは寄付金を集めるのが目的で良くあるが、学友会の目的・OBに対するサービスが現時点ではわかりにくい。

・終身会費2,000円ほどの段階(入学段階)で集めるのか。

・卒業生からどのように会費を集めるのか。

・個人情報学友会と共有するにあたり、卒業生への同意はどのようにとるのか。

・新入生は全員強制的に加入させるのか

→上記課題は確かに重要な課題であり、その他にもクリアすべき課題は多いと想定される。現在提案されている会則(配布資料)はあくまでも決定事項ではなく案であるため詳細は今後決定していくものと池田理事より説明があった。

#### 5. 閉会挨拶(片山理事)と奥野理事ご挨拶

##### 第49回理事会後の編集予定の変更について(おことわり)

今回の理事会後、奥野先生の学長選任のお知らせと学友会(仮称)設立・ネットワーク構築の議案(協議事項(b))は鷗朋会と会員にとって大きなニュースであり、速報を要すると判断するに至りました。そこで、両記事に絞ってこれらをニュースレターで取り急ぎお知らせするのが順当であり周知を図りやすいと考えました。理事会で報告・協議の内容と異なるのは次の2点です。

(1) 鷗朋14号発行に先立ってニュースレターを別途発行する。

(2) 上の(1)に伴う予算額や鷗朋14号紙面構成などの変更。

理事各位におかれましては、先に述べました理由により、編集予定等が理事会で報告・協議の内容と異なりますこととお詫びすると共にどうぞご理解くださいますようお願いいたします。

会長 定兼廣行

平成 21 年度会計予算案

(H.21.4.1-H.22.3.31 単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	471,284	振込手数料	90,000
		通信費	275,000
同窓会会費	1,500,000	役務費	627,200
理事会参加費	50,000	会議費	110,000
		事務費	60,000
		印刷費	350,000
		備品費	50,000
小計	1,550,000	雑費	3,000
		小計	1,565,200
		次期繰越	456,084
合計	2,021,284	合計	2,021,284

**平成 21 年度分  
会費納入のお願い**

同窓会費(¥2,000/年)をまだお送りいただけていない方はできるだけ早く同封の振込用紙にて納入下さいますようお願い申し上げます。(平成 21 年 5 月末日現在で未納の方には、請求書を同封しておりますのでご確認ください。)

毎回催促がましくご請求申し上げ誠に心苦しいのですが、何分本会は皆様方からの会費のみで運営いたしております。なにとぞ御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

**「鷗朋」第 15 号への原稿募集・・・自由なテーマでお書きください！**

- ・近況報告、同級生との同窓会開催顛末、地元の紹介、技術的なレポートなど、自由なテーマでお書き下さい。
- ・原稿は、郵便(原稿用紙やフロッピーディスク)、ファックス、電子メールなどでお送りください。
- ・分量については、柔軟に対応します。写真やイラストつきの原稿も大歓迎です！

**「鷗朋」の表紙絵、表紙の写真募集！**

- ・油絵や水彩・CG にいたるまで、種類は問いません。是非、皆様の作品をお寄せ下さい。

宛 先:

〒599-8531 堺市中区学園町 1-1 大阪府立大学大学院工学研究科  
海洋システム工学分野気付 鷗朋会事務局  
TEL/FAX: 072-254-9914  
E-mail: doso@marine.osakafu-u.ac.jp

**「鷗朋」編集を手伝っていただける方募集しています！**

原稿テーマの企画など、より良く、楽しい「鷗朋」にするために、あなたの力をお貸し下さい！

ご協力頂ける方がおられましたら、自薦他薦問わず、鷗朋会事務局までご一報を・・・

## 博士・修士論文ならびに卒業論文のテーマ

### 博士論文 (博士後期課程)

(指導教員)

ルディ ワロ プラスチック	(大塚)	柔軟な円柱の励振特性に関する実験的研究
増本 彰	(奥野)	円柱型浮体によって回折される波に関する研究

### 修士論文 (博士前期課程)

(指導教員)

足立 幸一	(馬場)	海洋における砂輸送に関する研究～沈降のモデル化とその効果～
井谷 真由加	(馬場)	縦波とオイルフェンスの柔軟性が漏油に及ぼす影響に関する実験
小浦 拓也	(池田)	中速トリマラン型 PCC の開発
河村 恵里	(正岡)	デジタル画像相関法を用いた高精度溶接固有変形推定法の開発
佐地 健太郎	(奥野)	海洋短波レーダの船舶搭載による表層流計測手法に関する研究
重松 康平	(片山)	滑走艇の超高速航走時流体力に関する基礎的研究
杉本 聡太	(坪郷)	斜航をとめない低速で前進する浮体の波浪中抵抗増加について(Diffraction 問題)
多田 康司	(奥野)	DIN 連続計測器を用いた海域モニタリングに関する研究
多羅尾 保允	(片山)	一点弛緩係留ブイの荒天中逆回転運動の計算法に関する研究
旦 越雄	(正岡)	溶接力学解析のための MLPG(メッシュレス)法による熱伝導解析法の開発
長野 真二郎	(珠久)	自動車運搬船への太陽光発電設備導入と港湾内ゼロエミッションに関するフィージビリティスタディ
福永 恵太	(池田)	船体運動データを用いたリアルタイム船上運航支援システムに関する研究
松井 敦	(大塚)	磯焼け海域における藻場生態系モデルの構築
山北 雅史	(大塚)	海陸一体型バイオマス有効利用システムの総合評価
脇川 慎太郎	(馬場)	回転が重力流の挙動に与える影響に関する研究
脇水 俊行	(有馬)	予防安全技術としてのヒューマン・モニタリング・システムの開発

★佐地 健太郎君は【海洋システム工学分野 最優秀論文賞・日本船舶海洋工学会奨学褒賞】を受賞しました。

★旦 越雄君、福永 恵太君は【海洋システム工学分野 優秀論文賞】を受賞しました。

(指導教員)

池本 昌仁	(山崎)	画像解析による熱水系周辺生態系賦存情報の定量化
大西 星輝	(珠久)	PCC に働く風圧力およびその低減方法に関する研究
岡部 直樹	(有馬)	緊張ストレス環境における脳血流・動脈血流の計測と解析
恩田 尚拡	(正岡)	ステレオ画像法を用いた溶接時における三次元変形その場計測
河井 宏道	(有馬)	グライダー型乱流微細構造観測プロファイラーの開発に関する研究
久保内 俊介	(大塚)	藻場修復のための海洋深層水滞留手法に関する実験
公江 仁一	(馬場)	重力流の先端部の構造に関する研究
小林 昇平	(池田)	横波中パラメトリック横揺れの発生予測 ～復原力変動の推定～
後藤 康二	(山崎)	コバルトリッチクラストの微地形把握と採鉱技術の基礎的検討
杉原 拓匡	(池田)	損傷客船の帰港時における船長へのガイダンスに関する一提案
辰巳 貴俊	(池田)	瀬戸内海用両頭型クルーズ客船の開発と性能分析
土橋 知幸	(勝井)	船舶のデッキ滞留水の挙動に関する数値解析
西澤 浩司	(池田)	瘦せ型幅広の新船型を採用した PCC の可能性に関する研究
藤井 春菜	(片山)	高速三胴船の操縦運動特性に関する基礎的研究
藤原 英雄	(珠久)	PCC の斜航流体力に関する実験的研究
堀 友則	(正岡)	MLPG 法による熱弾塑性解析法の開発と溶接問題への応用
松田 精一郎	(坪郷)	定常波漂流力の新しい表示とその数値的検証
三谷 俊輔	(大塚)	分光スペクトル画像を用いた沿岸域表層の物質濃度分布の計測
南 雄介	(勝井)	滑走艇航走性能シミュレーション手法の開発とその評価
吉岡 祐貴	(片山)	浅喫水断面での横揺れ減衰力特性について
生島 一樹	(正岡)	陽解法 FEM に基づく大規模構造の高速化溶接力学解析手法の開発
片山 卓也	(馬場)	浮体式曝気装置による成層流体の混合に関する研究
山内 裕文	(有馬)	群知能海中ロボットによる海底微地形調査の概念計画
山田 阿門	(山崎)	マンガン団塊の開発に関する環境指標を加えた総合的経済性評価

★公江 仁一君は【白鷺賞】を受賞しました。

★生島 一樹君は【海洋システム工学分野 最優秀論文賞・日本船舶海洋工学会奨学褒賞】を受賞しました。

★大西 星輝君、堀 友則君は【海洋システム工学分野 優秀論文賞】を受賞しました。